

---

gradge

クロイ名無

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

graduate

### 【Nコード】

N7487Z

### 【作者名】

クロイ名無

### 【あらすじ】

主人公の深峰快<sup>ふかみねかい</sup>は特に変わったところのない高校生<sup>にしまたりよう</sup>。春、高校2年生になった日、友達の西又良や幼馴染の天野桜<sup>あまのさくら</sup>などと話していると文通の話になり、快も文通を始めることに初めて早々『グラッジ』と名乗る人物と文通をすることに。しかし、数日後に届いたグラッジからの奇妙なメールで快の人生は大きく変わる。

恋愛、ホラー、推理（？）、いろいろ混ざった（混ざってしまった）

新ジャンル（？）小説

小説&まんが投稿屋にて連載済み

## 始まりのメール〜序章〜

To グラッジ From

春は出会いの季節だと友達から聞いたことがある。確かに、入学式やら進級などでの出会いは必然と増えるだろう。卒業式を言えば別れの季節だが……まあ、そこは気にしないでおこう。とりあえず、春は出会いの季節だ。君と会えたのも何かの縁だと思って、仲良くしていきたいと思う。よろしく

俺はパソコンに簡単に文を打ち、送信相手へのメールアドレスが間違っていないかを確認して送信ボタンを押した。

「ふー。流石に初めてのことってのは緊張するな。」

俺は椅子の背もたれに体重を預けながら、一息ついた。そのときにはもう、画面に『送信完了』と表示されており、引き返せないところへ来ているのだと実感できた。

「しかし、いくらなんでも俺までマジでやるとは思わなかったな。」

俺は自分に呆れながら昨日のことを思い出した。昨日は始業式で、数週間ぶりにクラスの人と会った。春休みということで、会わない期間は短いので、誰もそこまで変わっていないかった。メールで話したりしていたので、直接は会っていなくても自然と話せる。その時に出てきた話題が【文通】。文通と聞いたときは「これまた古風なことを」と思ったが、実際は少し違って、ただ単に専用のメールアドレスを作り、ネットに晒す。そして文通をして欲しいという内容を書き、そのメール宛に来た最初のメールの人と文通みたいにメールをし合おうというのだ。もちろん、晒すサイトはちゃんと友人のサイトで、注意として送るとどうなるかは書いてあった。俺は反対したが、皆がその話にのったこともあって、その日からスタートしたのだ。そして、その日の夜、さっそく俺の元にメールがやってきた。名前は『グラッジ』と書かれていて名前からは男か女かは分からない。内容は簡単なもので、挨拶だけで終わっていた。

「…………さて、そろそろ学校へ行く用意でもしとくか。」

俺は電源を落とし、立ち上がった。俺は狭い部屋の端にあるクロゼットやタンスから服を取り出し、着替えだした。脱いだ服は綺麗にたたみ、タンスの中へ入れると、1階へ降りていった。

「あ、快君。おはようございます。」

1階へ降りると、幼馴染の天野 桜が椅子に座ってご飯を食べていた。昔から勝手に入って（合鍵渡したのは俺だけど）勝手に食べているので、問題はない。長い黒色の髪にはウェーブがかかっていて、その髪は腰より少し上まで伸びていた。顔立ちはスッキリしていて、美少女と言えるほどの容姿。おまけに背が少し低いので、学校では人気者（マスコミ的意味を多く含む）の幼馴染だ。ただもう一つ、この幼馴染の左手がないことも、有名な理由だ。他にも背中に、大きな火傷の跡があるが……まあ、知ってるのは俺ぐらいだ。

「快君は朝、どうします？」

「え？あ……どうしようか……。」

桜のことに気を取られていて返事が変になってしまったが、なんとか気づかれなかったと思う。」

しかし、朝か……。基本的に俺はあまり食べ物を食べない。というより、食べられない。特に調理したものが駄目だったりする。なぜ駄目なのか。それはよく分からないけど、なぜだか体が拒否する。空腹が限界近くまでくれば食べられるが、基本的に食べようとすれば吐いてしまう。無理をすればなんとかなるが、両親が出張中なので、無理に食べる必要はあまりない。俺が食べないと両親が心配するから、その時のために体力は温存しておこう。……まあ、ただ食べたくない言い訳だけだ。

「いや、いいや。」

「そうですか。」

桜はそう言うと、片手で器用にご飯を食べ、立ち上がった。そのまま歩いていき、桜は食器を流しに置き、日曜大工が趣味の父が、桜のために付けた、食器を固定するものに固定して、食器を洗った

「じゃあ、いきましようか。」

朝なうえに桜は小食なので、さっさと食器を洗うと、カバンを持ち一緒に玄関を出た。昔から小・中・高と同じ学校へ通っているの、一緒に登校するのが普通になっている。中学の頃は冷やかされたりしたが、俺も桜……は赤くなって恥ずかしがっていたが、俺のほうは特に気にならなかったもので、いつも一緒に登校していた。桜自信も、恥ずかしがっても、毎朝俺の家まで来ていたので、本当に単純に恥ずかしかったただけなのだろう。

「そう言えば快君。昨日、西又君と話していた文通のことなんですけど、誰かから返事はあつたんですか？」

『西又君』とは、例の文通の提案者であり、本名は『西又 良』。楽しいこと一番を信念とさえしている奴である。現に、付き合いはそこまで長いほうではないが、今までに法律違反をギリギリで避けている感じた。……つまり、解釈の仕方によっては法律違反をしているのだ。本人は、警察に捕まったりしない限り無罪だと主張しているが、実際にはギリギリである。

「ああ。一応な。昨日の夜に来たんだ。」

「へえ。こういつてはなんなんですが、変な人ですね。」

「変？　どういうこと？」

「あちらも専用のメールアドレスかもしれませんが、それでも見ず知らずの人にアドレスを教えて連絡の仕合をしようとしてきたからですよ。」

確かにそう言われれば変な人だ。とりあえず、俺だったらメールは送らない。相当暇をしていたら別だが、それなら見ず知らずの人と連絡を取り合うより、友達にメールをした方が楽だし、楽しい。

「それで結局のところ、その文通は何をするんですか？」

「何って……普通に世間話をするだけだけど？」

「そうなんですか？　私、文通をやったことがなくて、どんなことをするのか気になっていたんですよ。」

実は、桜は携帯すら持っていない。今の時代、なくては不便とま

ではないかもの、持っていないのは珍しいが、本人が必要ないと言っているので買っていないらしい。

「特に特別なことをする気はないな。良なんかは相手が女性だったら会いたいて言ってたけど」

「快君も、もし近所に住んでいたら、一緒に出かけたりしないんですか？」

「んゝ……どうだろう。」

「そうですね。……ところで、話は変わりますが、数日後にこの町の神社でお祭りがあるのは知ってますか？」

「祭り？」

祭りなんてあったらどうか？春祭り？……いや、ないだろ

「なんでも、ある国の首相さんの奥さんの生まれがこの町のように、その首相さんと奥さんが数日前からこの町に来てるらしいんです。

それで、出国前にお祭りをするらしいですよ。」

「へえゝ。……それで、桜はその祭りに行くのか？」

「すみません。私はその日は用があるので、いけないんです」

「そうか。なら俺も家にいるか。良と男2人で回るなんて悲しいだけだからな」

その後も、なんでもない雑談が続き、登校した。俺と桜は一緒にクラスなので、教室へ行き、席へ着いた。

「よう。誰かからメールは来たか？一応、お前以外に聞いたが、誰も来てないそうだ。」

席に着くと、さっきの話に出てきた西又 良が現れた。長身で、ボサボサな髪。元々の顔はいいはずなのに、性格ゆえにヘラヘラした顔になり、一部の女子に『残念なイケメン』と呼ばれている男。楽しいこと一番という性格を除けば、明るいし、義理堅いし、頭はいいしで、むしろその性格さえ除けばモテモテだろうと想像できる。昔本人に言ってみたが、「無理無理。この性格は直らないって。それに、俺はそこまでイケメンじゃないって。」と返された。

「俺の所には昨日の夜メールが来たぞ。」

「何！？マジか！どんな奴だ！」

俺が言つと、良は顔を思いつきり近づけてそう尋ねてきた。……  
どうでもいいが、顔が近い。

「ああ。グラッジって名前のさんから」

「グラッジ？……名前からして男っぽいな。」

「でも、偽名だろ？俺だって だし」

ついでに言つと、元々は快という名前だから『カイ』にでもしようかと思つたが、『かい』で変換してみると、ギリシャ文字で『  
』があつたので、そっちにした。

「まあ、そうだけど、女性で『グラッジ』なんて付ける奴いるか？  
好きな歌手とかそういうのなら分かるけど、そんな奴は聞いたこと  
ないしな。」

楽しいこと一番ということで、女性方面の雑誌などすら読む良が  
言つなら、ほとんど間違いはないだろう。

「桜ちゃんも聞いたことないだろ？」

「……そうですね。聞いたことがないですね……。」

桜は少し考えると、そう答えた。そう答えたところでチャイムが  
鳴つてしまい、そこで会話は終了し、良も席へ戻つた。担任が何か  
言っているが、聞き流す。さして重要なことではないだろう。朝の  
担任の報告を真面目に聞く奴など、桜や良以外にはいないだろうし  
な。

むしろ、重要なのはこの後だ。この学校、特に進学校でもないここ  
ろか、授業自体、真面目にやる教師がいないのに、始業式の次の日  
から通常授業がある。しかも、今日は金曜日で、明日からまた休み  
なのに授業があるなど、無駄過ぎる気がする。面倒なこと極まりな  
い。

## 何気ない日常

「ふー。流石に久しぶりの授業はキツイな」

授業が終わると伸びをしながらそう言う。特に誰かに言ったわけではないが、隣の席が桜なので、何かしらの返事はしてくれるだろう。

「そうですね。」

言葉ではそう言っているが、桜は笑ってそう言うし、本人にはほとんど疲れが見られない。まあ、桜の場合は体型を維持するための運動以外はほとんどしないし、そこまで疲れるようなことをしている記憶がないので、『疲れている』という状態自体を見たことがほとんどないんだが。

「というか、なんでそんなに平気そうなんだ？」

「春休みにも勉強はしてましたので。」

「へー。……とは言っても、春休みなんて短い休みに、宿題以外をやる物好きなんて、桜以外にいないだろ？」

「いいえ、そんなことはないですよ？春休みにたまに図書室へ行っていましたけど、大抵、西又君がいましたから。」

「あー……アイツも例外だな。アイツはお前みたいに勉強したくてしてるわけじゃないから。」

良の場合、昔から「とりあえず勉強ができれば、犯罪以外なら何やってもいい」と親から言われ続けていたらしく、結果として、学年主席を楽々維持し続ける頭脳の持ち主となった。桜も努力しているのだが、今まで一度も良に勝てたことがない。とはいっても、良とはいつもギリギリ負けてるレベルだし、3位の人との差が大きい。中の中の成績の俺からしたら十分過ぎる

「それでも努力を続けられるのは凄いことだと思いますよ？」

まあ、確かにそうだ。俺だったら、そんなことぐらいじゃあ動かない。そりゃあ、学年主席を取るたびに100万円やるとか言われ

れば別だが、基本、放任主義な両親なので（というより、出張ばかりの両親との記憶より桜との記憶の方が多い気がする）、良のような条件では動く気にはならない。

「まあ、とにかく、俺には休日の勉強は無理ってことだ。」

桜は「そうですか」と言う、「それでは帰りましょうか」と言い、立ち上がったので、俺も立ち上がった。

俺の家と桜の家は方角は同じだが、特別近いわけでもなければ、遠いわけでもない。まあ、歩いて5分ほどだろうが、住宅地なので当然だ。俺と桜は幼馴染だと思っし、周りもそう言っている。別に問題ないのだが、特に家が隣同士で子供の頃から兄妹のように育った、なんてことはない。出会ったのが小学校入学前と言う、早い時期だったので、自然と一緒にいる時間が多かっただけだ。その頃から下校は一緒にしているので、今日も一緒だ。登校の方は小学校の頃からだったはずだけど、なぜかは覚えてない。別にどうでもいいだろう。

俺は家に帰ると、さっそくパソコンを起動した。相手がどの誰だかは分からないけど、もしメールが着ているなら早めに返した方がいいだろうと思っただからだ。……まあ、そんなマメなことをやるのも最初の内だけだろう。そう思いメールを確認してみると、メールが1つ来ていた。

To From グラッジ

確かに、春は出会いの季節だと思う。……でも、出会いがいいものかは分からない。出会わなければよかった出会いもある。重要なのは、出会って、どう発展させるかだと思う。だから自分は、出会いを探す前に、今までのことを振り返ってみたい。

……内容はとりあえず理解できるが、まさかそんな返事が来るとは思っていなかった。他人がどういう考えを持とうが、興味はないけれど『春は出会いの季節』なんて言ったのは良で、ただ単純にメールを書くときに思い出したから書いたただけだ。俺自身は、このあとに簡単な自己紹介でもするのかと思っただけ、相手はそうは思っ

てないみたいだ。……さて、どう返せばいいのだろうか？急に話題を変更させるわけにもいかないし、かといって俺は春にそこまで関心があるわけではない。過去を振り返る気もないし、これから先の未来……例えば明日にでも、可愛い転校生が来る展開などを想像しても仕方ないと思う。第一、転校生が来たとして、俺の人生にはほとんど関わらないと思う。桜と一緒に「転校生なんて珍しいな」とか言ったりして、少し話題にするだけで、すぐにどうでもよくなると思う。だから、自然と返信する内容なんて、適当に共感した振りをするか、反対の意見を書くしかないと思う。

俺は心の中で『春は出会いの季節』なんてことを言った良を恨みながら、メールの新規作成ボタンを押して、文章を書き始めた。

To グラツジ From

確かに、出会わなければよかったと思う出会いもあったけれど、自分はそこまで悪い出会いがなかったせいかな、やはり出会いが欲しいと思う。悪い出会いも良い出会いも、出会いがなければ起こらないことだから、それが良い出会いであることを信じて、出会いを待ちたい

パソコンにそう入力し終え、送信ボタンを押した。一応、俺の本心を書いたけれど、果たしてこれでよかったのかは分からない。別に気軽にメールする感じでいいのだろうけど、なにぶん、相手がどんな人か分からないので、どう書けばいいのかが分からない。良や桜相手の方がどれだけ楽かがよく分かる。さっきも考えたことと同じだけれど、俺は別に本気で出会いが欲しいわけじゃない。今のまま、適当に高校生活をして、もしかしたら良や桜とは違う大学かもしれないけど、とりあえず大学に行って、就職。飛び切り良い人じゃなくても、悪くない人と結婚して、子供を作る。そしてゆっくり老衰。そんな感じの人生でいいと思ってる。むしろその方がいい。死ぬまで特に大きな変化のない生活でいいと思っている。悔やむ過去も無く、未来に希望を持つでもない、平凡な人生。初めのメールであんなことを書かなければ、おそらく、さっきのメールでも、

出会いなんて興味ない』と書いたと思う。俺は時計を確認し、とりあえずの寝る時間を決め、ゲームを始めた。

## 始まりのメール警告

起きると昼前だった。まだ春休みのダラダラした生活が抜けないのか、目覚ましをセットしていなかったからなのか、昨日寝たのはまだ早い時間だったのに、昼まで寝てしまった。別に用事などはないし、親もいないのでいつまで寝ていても問題はないのだけど……流石に昼までというのはどうかと思う。

俺はベットから出てカーテンを開けた。外は当然のように明るくて、結構暖かい。再びカーテンを閉め、さっさと着替えて、カーテンをもう一度開け、下に降りる。昨日は朝、昼はもちもん、夜さえも食べなかったので、今なら少しは食べられると思う。

1階に降りると、当然のように誰もいない。両親が出張に出始めたころは違和感があったけど、流石に慣れている。むしろ、もしかしたら、両親が帰ってきて、両親がいる方が違和感を感じるかもしれない。

俺は冷蔵庫を開け、中を確認してみた。パツと見た感じ、すぐに食べられるのがイチゴ、ヨーグルト、チーズ、ウインナー。生でないなら野菜。調理が必要なのが魚と肉。ご飯は炊いておいた記憶はない……というか、使い方が分からないので、あるわけがない。冷蔵庫を閉めて、戸棚を開けると、ツナの缶詰が1つ。

……どうしよう。そこまで食べる気はしないとはいえ、流石に駄目な気がする。空腹自体は問題ないのだが、ヨーグルトやチーズでは、『食べた気分』というのが満たされない。俺にとって重要なのは、『食べた』という満足感だからな。結局は『もう食べられない』という状態までは食べれないのだから、食べたという気分だけは持ちたい。……と、なれば一番いいのは魚か肉。……だが、俺に調理はできない。桜を呼ぶという手もあるけど、それは避けたい。こんなことで呼ぶのはどうかと思うし、向こうも迷惑だろう。

仕方ないのでツナの缶詰を取り出し、チーズとウインナーも一緒

に食べた。食べ終わると缶詰などの後始末をして、財布を持って外へ出た。夜はいらないうちでも、明日の朝はたぶん、腹が減っているだろうから何か買っておかないとまずい。選択としては弁当かパン。さつき肉か魚を食べたいと思っていたためか、異様に何か食べたい。まあ、何かと言えば肉を食べたいんだけど。

歩いて10分ほどの所にあるコンビニに入ると、意外な人物を見つけた。

「よお、良じゃないか。何してるんだ？」

雑誌売り場で立ち読みをしていた良に近づきながら、声をかけた。「おお、快か。お前こそどうしたんだ？お前がコンビニに来るなんて珍しいじゃないか。」

確かにそうだ。普段から料理は親か桜がやる（ほとんどの場合が桜だけど）ため、出かけること自体が珍しい。例え出かけることがあったとしても、それは桜と一緒にというのが多い。主な理由……というか、一緒に出かける理由の100%が荷物持ちだけど。まあ、その食材の5割ほどは俺の家の冷蔵庫に入るので、文句は言わないけど。

「俺は明日の朝……いや、昼かもしれないし、夜かもしれないけど、とりあえず明日の飯を買いに来た。」

「ん？お前の両親が出張中というのは聞いたが、桜ちゃんが作ってくれるんじゃないのか？」

確かに、あの甲斐甲斐しい幼馴染は、春休みの間も毎日飯を用意してくれた。朝来て、いつでも暖めれば食べられる物を作り、冷蔵庫に入れていた。だから、春休み中、俺は外にでなくて済んでいたのだ。……まあ、結果としてそれはいいのか悪いのかは分からないけどな。

「今日は来なかったんだよ。起きたのもついさつきで、食べたものもツナ缶1つにヨーグルトとチーズだけ。明日はそんなことがないようにと思ってな。」

「というか、1日をそれだけで生きていけるのか？」

良が不思議そうに見てくるが、俺は平然と頷く。確かに、常人ならちよつと無理だろうけど、俺にとつて常人の『腹が減った』というレベルはまだまだ大丈夫なレベルなのだ。ろくに食べる物がない生活をしている人にとつての『餓死する』より少し前のレベル辺りじゃないと、俺にとつての腹が減ったにはならないのだ。そりゃあ、昔は常人の『腹が減った』で何度も食べようとしていたけど、そのたびに吐くので、今ではもうその感覚すらなくなった。食べられる状態になつても『あ、そろそろ食べないと』というような感じしかない。昔はその感覚が分からなくて倒れたこともあった。

「で、お前こそ何してんだ？雑誌の立ち読みなんて珍しいんじゃないか？」

聞いた話だけど、コイツはチェックすべき雑誌は全て買っているらしいので、立ち読みなんてするとは思えない。……まあ、買うという時点で、こいつの所持金と毎月の小遣いがいったいいくらなのかとかが気になるけど。

「別に大した理由はないんだが、ちよつと妹がこの雑誌の話をしていてな。」

「へー、妹がいたんだ。」

コイツの妹と聞くと、どうしても変なイメージしか出てこない。

なんというか……顔立ちとかは真面目そうで、成績はいいのに、天真爛漫な女の子。良自身、最低限の身だしなみは気にするらしいが、家では髪を梳かすなどしないらしいので、妹の方もボサボサの髪で……うん、切るのも面倒だからという理由で凄く長い髪とかしてそう。身長以上の長さがあつて、学校に行くときは括つたりして誤魔化してそう。

そんな俺の想像を知るはずもない良は、その先を説明してきた。

「妹の年代……俺たちより2年下なんだが、その年代でこの雑誌が流行っているらしい。」

良がそういい、こちらに見せた雑誌を見せしてみると、単なる女性用のファッション雑誌だった。

「あれ？前に良が話してた方は流行ってないのか？」

俺は前に良が話していた雑誌を記憶を頼りに探し、取ってみた。

「ああ、そうらしいんだ。なんでも、そっちの雑誌よりこっちの雑誌の方が服が可愛いだとか。」

「へへ。」

俺は良から雑誌を借りて2つを見比べてみたが……全く分からない。どっちも同じような気がする。そりゃあ、微妙な差ならあるけど、どっちも可愛い気がするし、正直、どっちでもいい気がする。

「良は……分かるのか？この差が。」

「いや、認めるのは少し癪だが、分からない。」

「そうか。」

今まで、いろいろな雑誌を読んできた良が分からないというのは意外だが、それだけに、この雑誌の感覚は女性特有なのだというのが分かる。

「まさか俺に理解できない感覚があるとはな。世界は広い。」

高校2年生の時に痛感するものとしてはどうかと思うのはさておき、とりあえず俺はもう話すことはないので、弁当を買い、良に別れを言って、コンビ二を出た。

この辺りには特に娯楽はない。少なくとも、電車に乗らないとゲームセンターなんてものはないし、本屋すらない。電車に乗らずに行ける場所といえば学校かコンビ二かスーパーぐらいなものだ。それでも日常生活には困らないので、滅多に電車に乗ったりしない。俺はさっさと家に帰り、冷蔵庫の中に弁当を入れた。賞味期限は明後日なので、明日、万が一桜が来て飯を作ってくれたとしても、明後日の夜にでも食べればいいだろう。

俺は2階へ上がり、パソコンを付けた。昨日メールしたのが夜なので、たぶんメールが来ていると思ったからだ。

To From グラッジ

自分にはよかった出会いなんてなかった。出会った人、ほぼ全員が殺したい人だった。友達は何論、両親さえ、なぜ自分を産んだの

かと恨んだ。だから、出会いを探す前に、定期的に過去を振り返り、自業自得だと思わないと、誰かを殺しそうだった。

俺は内容を読んで驚いた。……だけど、すぐにその驚きはなくなった。ネット上などでは、結構こういうことがあるということを知っていたからだ。日常生活では口に出せない欲求、不満、怒り、嫉妬。でも、ネット上では簡単に出来る。俺は楽観的に考え、とりあえず慰め……というより、なだめの文を書こうと新規作成ボタンを押そうとして気づいた。もう1つ、メールが着ていた。現在、俺のこのメールアドレスを知っているのはグラッジ1人のはず。なぜこちらが返信する前に送ったのだろうと不思議に思いながら、そのメールを開いた

To From NO NAME

今、私は貴方とグラッジが2日まえ、の夜に始めて貴方にメールをしたことしか知らない人、グラッジは明日から人を殺す。が、回数は6回つ、いに最後に死ぬのは快誰か止めてこ、のは人を殺、人す、る。本、当に天、に祈る、お、父、さんお母さん救、つて。病、院、へ来てさ、あす、ぐに。人。へ、ル、

そんな文が書かれていた。……正直、意味が分からない。なんなのだろう、このメールは。差出人は『NO NAME』。つまり未登録。グラッジではない。間違いメールということはないだろう。文の中に『グラッジ』という人物の名前があることから、少なくともグラッジと知り合い。更に、俺の名前さえ出ている。……これは誰なんだ？それに、変な文の区切り方。今じゃあ使われてるのか分からないうような『、』の前か後を繋げると正しい文になる古い暗号かと思ったけど、紙に書いて試してみても『今えがつこ殺す本天るお父救病院さあすヘル』か『私の回いの人る当にお父さつ院へあくル』になつて、おかしい。じゃあ、この区切りはなんだ？途中から文がおかしいことから、明らかに無理矢理何かメッセージを作るために繋げたとは思えないのに……。……まあ、考えても仕方がない。どうせ俺には関係ないだろう。俺の名前が出ているけど、

変換ミスか何かだろうし、グラッジの弟か妹が悪戯で送ったのだろう。

俺は適当に前の文の返事を書き、メールを送った後、適当にパソコン用のゲームをやったり、宿題をやったりして時間を潰した。

## 始まりのメール予告

起きたときにはまた昼前だった。昨夜、ムキになってマインスイーパーの中級のタイムを縮めようと、4時ぐらいまでやっていたのが駄目だったのだろう。

俺は起き上がり、着替えて下に降りた。下は昨日と同じように静かで、冷蔵庫の中には昨日買っておいた弁当があるだけだった。もしかしたら、桜は一度来たのかもしれないけど、冷蔵庫に弁当があるのを見て、飯を作るのをやめたのかもしれない。アイツ、来ても絶対に起こしてくれないからなあ。

俺はレンジで弁当を適当に温めて食べた。

……さて、これからどうしようか。明日の飯……は、とりあえず桜が作ってくれると思う。だから、コンビニに弁当を買いに行く必要はない。

……仕方ない。メールでもチェックして、またゲームでもするか。一応、冗談だとは思うけど、昨日のグラッジのメールも気になるし。そう決めて立ち上がり、2階へ上がった。メール画面を開いてみると、予想通りにメールが1つ来ていた。

To From グラッジ

始まるのは6時。1日1回。最後の6回目に貴方。

最初は地獄の炎が身を焼き、その体は二度と動くことはなくなる。自らが招いた炎によって、灰になる。

次は連続殺人、殺すのは10人。残すのは10の跡。近くじゃないけど近くににいる人。知らないけど知っている人。さあさあ次に死ぬのは10人。

3つ目。後ろめたいことがないならば、前を見て歩け。もし非があると思うなら、その頭を下げ過去を悔い改め、罪を償え。

4つ目。泥棒は物を盗むだけ。強盗はもっと大切なものを取っている。さあ氣をつけて、今度は死神が貴方の命を取りに来るよ。

5つ目だ。ゴールは近い。早く見つけてご覧。奪う命はあと2つ。次は裏切り者、連帯者。お金は大切。でも、絶対のものではない。お金に眩んだその目はいらぬ目

最後に貴方。永遠に感じられる日も終わりが来る。さあ、貴方の元へ参ります

それだけだった。ただ、なんとなく予想できることは、本当に人を殺すつもりなら6時に行い、最初の殺し方は焼いて殺す。そして2回目には10人死ぬ。そして最後には俺……だと思ふ。分かるのはそれぐらいなもの。……でも、もし本当に殺すつもりなら、なぜこんなメールを送るのだろうか？漫画とかアニメで予告状を出す怪盗や殺し屋がいるが、そんなのは話を面白くするためにするだけ。実際にそんなことをしても、メリットは何もないはず……。……まあ、単なる冗談にそこまで真剣に考えても仕方ない。

そう結論して、メール画面を閉じ、ゲームを起動した。メールの返信を忘れていたことを途中で思い出したが、正直、どうでもよくなっていた。

## 始まり

ピピピピッ！ピピピピッ！ピピピピッ！

「……………朝か。」

アラームの音で目が覚め、時間を確認すると、当然のようにセツトした時間が目に入った。今日からまた学校なので、起きないとマジ。俺は体を起こし、制服に着替えて下に降りた。

「……………あれ？桜は来てないんだ。」

1階がやけに静かだと思ったけど、まさか桜が来てないとは思わなかった。桜が来ない日なんて、日直で行くのが早い日ぐらいだし、それでも前日にはちゃんと云うのに…………。

ちよつと考えたけど、特に理由が分からなかったので、仕方ないので考えるのはあきらめた。どうせ学校へ行けば会えるだろう。学校に着くと、自分の席へ向かいながら、桜の姿を探した。自分の隣の桜の席。そこからグルッと教室内。しかし、どこにも桜の姿はなかった。すると、席にカバンを置くと同時にぐらいに、良が話しかけてきた。

「よう。桜ちゃんは？」

「いや、知らん。まだ来てないのか？」

まだ来てないとなると、考えられる原因は…………風邪…………かな？でも、アイツの場合、食生活とか生活リズムがいいせいなのかもしれないが、そういうことは滅多にない。

「快。…………お前…………何か怒らせるようなこと言っただんじやないか？」

良が俺を呆れるように見てくるが、その可能性はないと思う。金曜日の時に話した内容なんて、特になんでもない世間話だし、別れるときも普通だった。…………まあ、体調が悪いのだろう。滅多にないとはいえ、あくまでも『滅多にない』だからな。

良にそう言っていると、良も納得したのか、「そうだな」と頷いた。

「そつえば、昨日の火事だけだな。」

「火事？」

昨日、火事などあったのだろうか？昨日はそこまで早く寝た気はしないんだが……。深夜に起こったのか？

「知らないのか？……あゝ、いや、すまん。そういえば、お前の場合、眠りが深いからな。一度寝たらなかなか起きなかったな。」

良の言葉に、若干イラツとくるが、事実なのでしょうがない。桜が俺を起こさないのもそれが原因だし。

「で？そういうからには深夜に起きたんだよね？」

「ん？ああ。深夜も深夜。3時頃だったかな。」

「そんな時間になんで火事が起きるんだよ。放火か？」

自分で言っておいてなんだが、それはないかとも思った。ここ数年、事件らしい事件など、こちらで聞いたことがない。火事など、俺が小学校の時以来だ。

「いや、たんなるタバコの火の不始末らしい。」

「へ。で、その話がどうしたんだ？」

「いや。この火事なんだが、事故とテレビでも新聞でも言われてるんだが、どうもそんな気がしなくてな。」

「どういうことだ？」

「まず、その家の主は一応、35歳の独身男性らしいんだ。」

「一応って？」

「ほとんど本人と分らないほど体が焼けていたらしい。残った部分と、その家を買った人などを調べて判明したらしい。それでも、正直、『おそらく』というレベルでの確証なほど焼けていたらしい。」

「

「ふゝん。どうやって身元を判明させるのかは知らないけど、そんなに焼けてるなんて、ある意味凄いな。……………ん？でも、それでなんで事故じゃないと思うんだ？」

「周りの家に、一切被害がなかったからだ。」

「でも、そんなことって普通にあるんじゃないのか？人は中にいるんだから。」

「ああ。だけど、被害がないということは、それだけ早く火は治まったということだ。それだけの間に、そこまで焼けるには、そもそも本人に火を付ける以外、不可能だと思うんだ。」

「うーん……。」

確かに良の言いたいことは分かる。その家がどれだけ大きいかは分からないし、発火場所も分からないけど、少なくとも、火事になつていれば普通の人は寝ていても気が付く。おそらく、俺でも自分の家が燃えていれば気づくだろう。35歳ということを考えれば、むしろ窓を破つてでも逃げられたと思う。そう考えれば、確かに事故としてはおかしい。とはいっても、起こってるものは起こってるで考えないといけない。35歳なんだから、酒を飲んでいたとかが考えられるし、持病を持っていたとも考えられる。他にも足を骨折していたとかでもいい。いくらでも可能性はある。

「まあ、こう言ったら死んだ人が可哀想だけど、俺たちが考えてもどうにもならないって。俺たちは探偵でもなんでもないんだから。」俺がそう言くと、未だに悩んでいた良も「そうだな」とだけいい、席に戻った。

俺はカバンの中を机に入れながら、桜のことを考えた。俺にとっては火事より桜の方が大事だ。

金曜日は特に何もなかったはずだから、土曜日……は、確か昼に起きて、昼にちよつと食べてそのままコンビニに行つて、良と話しただけ。桜の性格的に、朝起きなかったからとかいう親的な怒りはないと考えれば、あとは部屋でダラダラ過ごしていただけだ。日曜日にも昼に起きて、特に出かけるでもなく、パソコンをして……あれ？何かが引つかった。桜のこととは関係ない気がするけど、何かが引つかかる。なんだろう……？

気になつて、ずっと考えたけど、結局は答えは分からなかった。

## 違和感

昼休みになると、俺は桜の家に電話してみた。

『プルルル！プルルル！プルルル！』

「……………あれ？」

しかし、誰も受話器を取らずに、そのまま留守番電話になってしまった。確か、桜の父親は何をしているかは知らないけど、内職（それでも十分収入がいらしい）なうえに、母親は専業主婦。桜は体調が悪いのかどうかは分からないが、真面目な桜が学校に来ないという事態なのだから、両親のどちらかが出かけるのであっても、どちらかが残るだろう。あの両親は桜を凄く可愛がってるので、桜を置いて出かけることなど、月に一度のデートの日ぐらいだし…………（それはそれで問題がある気がするけど）。可能性としては両親も桜も出かけているパターンだけど、これも可能性は低いかな。知り合いの葬式とかが急に入ったなら分かるけど、それならそれで俺に連絡ぐらい入れるだろう。……………さて、どうしたものか。とりあえず帰りに桜の家によつ…………

『ブウーン！ブウーン！ブウーン！』

突然、携帯が振動し始めた。マナーモードの解除がいちいち面倒なので、当然といえば当然なんだが。

ディスプレイで番号を確認してみると、ついさつき電話したばかりの桜の家の電話番号だった。俺はすぐに携帯を開いた。

「もしもし、桜か？」

番号は桜の家だったので、桜の両親という可能性もあったが、そもそも桜の両親は俺の番号を知らない。もしかしたら、体調が悪い桜に代わって掛けてきた可能性もあるけど、桜の両親と電話で話したことなどないせいか（というか、桜や良以外と電話で話したことはほとんどない）自然と桜と考えて対応してしまった。

『もしもし。私だよ。』

しかし、予想通り相手は桜だった。

「ああ。どうしたんだ？さっき電話したけど、出なかったじゃないか。」

『あ、ごめんね。ちょっと忙しくて、出られなかったの。』

……あれ？また何か違和感が……。さっき、昨日のことを考えてたときにも何か引つかかったけど、今度はまた、別のことで引つかかるような……。

「そ、そうか。で、どうしたんだ？」

『どうしたって？』

「いや。今日、学校に来てないから、体調でも悪いのかと思って。」

『あ、うん。ごめんね。ちょっと体調が悪くて。』

何か……何かが引つかかる。昨日のことで引つかかったのは一瞬だけど、今はずっと引つかかっている感じだ。声は明らかに桜のもの……だと思う。電話越しだから確信を持って言える訳じゃあないけど、桜だと思う。というか、今回は向こうから電話をかけてきたのだから、桜のフリをする理由がない。

「そうか。じゃあ仕方ないな。早く元気になれよ。」

いくら考えても答えは分からないので、俺はさっさと会話を終わらせようとした。考え事に集中し過ぎて、体調が悪い桜に気を使わせたら悪いからな。

『うん。じゃあ、またね。』

「おう。……………ふ〜。」

向こうが電話を切る音がした後、俺の方も電話を切り、一息ついた。桜がとりあえずは元気だったという安心感と、電話中に引つかかった違和感からの疲れがきた。なんで桜との電話でこんなにも疲れないといけないのかと思うけど、桜に当たっても仕方ない。

俺は考え事をさっさと切り上げて、良の待っている教室へ戻った。アイツも桜のことを心配していたので、一応、元気だったことは報告しとかないとな。

「おお、快。桜ちゃん、どうだった？」

「元気そうだったぞ。あれなら、明日は来るんじゃないか？」

「そうか。それはよかった。」

その後は、黙々と昼飯を食べた。基本的に何でも話せる良だが、それゆえに話を振ると深いところまで話してしまうので、話を振るときは注意しないと、こっちがついていけなくなる（本人も自覚してはいるらしい）。だから、自然と良と付き合う奴はあまり自分から良に話を振らない。それは俺も例外じゃないけど、それでも一緒に食べるのは、ただ単に俺に友達が少ないのと、沈黙が苦痛じゃないことや、フツと浮かんだ何でもない話でも、ちゃんと付き合ってくれるからだろう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7487z/>

---

gradge

2011年12月29日20時52分発行